

## 1 研究主題

**主体的・協働的に学ぶ児童の育成**  
～深い学びにつながる対話と振り返りの活性化を旨とした発問・しかけの工夫・改善～

## 2 主題設定の理由

### (1) 学校教育目標から

本校は、教育目標を『鍛える』～心豊かでたくましい子どもの育成～としており、目ざす児童像として、①しっかり考え行動する子、②自分も友達も大切にできる子、③心身ともにたくましい子、④仲間と協力できる子、⑤ねばり強く最後まで頑張る子を掲げている。

主体的・協働的に学ぶ児童の育成を旨として、算数科の授業を中心に、対話と振り返りを重視した授業づくりを校内研修の大きな柱として位置付けてきた。これまでの取組を通して、対話のスタイルや、振り返りとして導入している適用問題や算数日記の習慣化が確立されるなど、一定の成果はあったが、目的や必然性の曖昧な「対話の形骸化」や「算数日記のマンネリ化」といった課題も明らかになった。そこで昨年度は、より効果的で必然性のある対話活動と活用可能な振り返りを探究する実践研究を進めてきた。対話に必然性を持たせるためには、児童が話したい、聞きたいタイミングで対話活動を仕組んでいくことや、対話のための対話とならないように対話のねらいを児童に明確に提示していくことが必要である。また、適用問題や算数日記による振り返りが次時や他教科、日常生活などへ活用できるようにしていくためには、その時間でつけたい力（資質・能力）が定着しているか測ることができる適用問題を用意し、その時間の学びや気づきを自分の言葉で再構築し、次時や他教科などへのつながりを算数日記に記述できるようにしていかなければならない。

「必然性のある対話」と「活用可能な振り返り」を活性化させていくことで、学習活動に主体性と協働性が高まり、深い学びの実現につながっていく。そして、対話と振り返りをより活性化させていくためには、教師の効果的な発問やしかけが不可欠である。今年度は、対話と振り返りを活性化させる「発問」や「しかけ」の工夫・改善を校内研修の大きな柱として位置付け、チーム清水小で実践研究を推進しながら、研究主題と深い学びの達成を旨としていきたい。また、主体的かつ協働的に活動していくことは、道徳的判断力の育成にも資するものであり、『豊かな心』の育成にもつながる。

以上のことから、この研究主題を推進することで、教育目標の具現化につながるものと考えている。

### (2) 児童の実態と各種学力調査の結果から

本校の児童は、人懐っこく、明るく元気で、指示された学習課題に対してまじめに取り組むことができる児童が多い。また、自ら考え、主体的に学ぼうとする学習姿勢や、最後まで粘り強く学習に取り組む態度も全体的に身に付いてきた。一方で、学力や家庭学習や読書量の差に顕れる学習習慣の個人差や、学校や家庭における生活習慣・態度などに課題が見られる。

平成29年度に実施した全国学力・学習状況調査の結果においては、全ての科目で全国・県の平均値を上回ることができた。2～5年生が受検した標準学力テストにおける1評定（算数）の児童の割合は19.4（目標20%未満）であった。また、1月に1～3年生が受検したCRT検査では1評定（算数）の割合はわずかに2.4%（目標7%未満）であった。さらに、かつて課題とされていた無回答の多さは大きく改善され、説明を要する記述問題でも正答率が概ね県平均値と同等かそれ以上になるなど、全校的に学力定着の水準は向上してきていると言える。一方で、1月に実施された高知県学力定着状況調査では、4年生は国語・算数とも県平均を下回り、5年生は国語と理科で県平均を下回った。したがって、今後はさらなる基礎・基本的な学力の定着・向上を図りながら、思考

力・判断力・表現力（＝活用力）を計画的かつ継続的に育成していくことが求められる。そのためにも、児童が主体的かつ協働的に考え、話し合い、考えを深化・統合し、まとめ、振り返ることが可能となる教師の発問やしかけなどの働きかけの工夫・改善を進めていかなければならない。

今年度は、教育課程拠点校事業の3年目を迎えるが、これまでの取組を継続・深化させながら、算数科の授業改善を中心とした研究に取り組み、算数科授業研究のモデル校として研究推進の役割を担っていく。そこで、研究部として『深い学び部会』、実践部として『確かな学力部会』『豊かな心部会』の3部会で組織的なOJTに取り組み、研究を具現化していく。

### 3 研究仮説

◎発問やしかけを工夫・改善していくことで、必然性のある対話や活用可能な振り返りが活性化され、主体的かつ協働的な学習活動につながり、深い学びが達成できるであろう。